

国文研ニュース

No.64 WINTER 2024



『新続古今和歌集』

目次

●メッセージ		
古典籍継承の意義	大谷 節子 1
●エッセイ		
本の“守り人”たち	横溝 博 2
自筆資料の楽しみ	堀川 貴司 4
●トピックス		
渡部泰明館長 紫綬褒章を受章	入口 敦志, 神作 研一 6
第16回日本古典文学学術賞受賞者発表	6
第16回日本古典文学学術賞選考講評	久保田啓一 7
人と機械がアタマをつきあわせて—「総合書物学」のいま—	木越 俊介, 松永 瑠成 8
人文機構広領域連携型基幹研究プロジェクト国文研ユニット		
「人口減少地域におけるアーカイブズと歴史文化の再構築」	西村慎太郎 9
福島県富岡町と当館とで学術交流・協力に関する基本協定を締結	西村慎太郎 10
日本古典籍講習会—4年ぶりの対面開催—	坂井 彪 10
岡山県立博物館テーマ展「正宗敦夫と正宗文庫」展観記	尾崎名津子 11
たましん地域貢献スペース展示「『源氏物語』の絵画を楽しむ」開催	糸 汐里 12
2023年度アーカイブズ・カレッジ短期コースと講演会	太田 尚宏 12
「古典の日」講演会に参加して	谷 知子 13
久保田淳先生より古典籍をご寄贈いただきました	海野 圭介 13
『この世界の片隅に』片渕須直監督トークイベント		
「つるばみ色のなぎ子たち—最新作『つるばみ色のなぎ子たち』と清少納言・枕草子・時代考証—」	中西 智子 14
総合研究大学院大学日本文学研究コースの近況	齋藤真麻理 14
くずし字講座「くずし字で昔ばなしを読んでみよう！」開催	糸 汐里 15

古典籍継承の意義

大谷 節子（国文学研究資料館運営委員、成城大学大学院文学研究科教授）

国文学研究資料館（以下、国文研）は2008年3月に戸越から、現在の立川の地に移転した。移転予定を伝えられた松野陽一館長が、移転は敷地の制約、施設の老朽化等々諸般の事情で止むを得ぬことながら、皆さんには大変ご不便をお掛けすることになりますと話されたのを記憶する。実際、関西から来る場合、殊に新幹線に品川駅が出来てからは、山手線を二駅乗れば辿り着けたのが、随分と遠く感じられた。

東京駅から中央線で立川まで行き、モノレールに乗り継げばよいのだし、どこに住んでいるかによって便不便が生じるのは当然なのだが、日本でただ一つの国文研であるから、当時、利用者の大半が不便を感じたことと思う。私も校務が多忙な時期とも重なって、足を運ぶ機会はめっきり減った。以前は、全国の大学図書館や公共図書館、文庫が所蔵する古典籍の撮影写真の紙焼きを並べた棚で閉館まで過ごしたものだが、それも展示や講演会で出向いた隙間時間に、足早に通り過ぎるだけになり、やがて、その習慣もなくなった。

既に前世紀末の1999年、ブダペストで開かれたUNESCO、ICSU 共催の世界科学会議で採択された「科学と科学的知識の利用に関する世界宣言」（ブダペスト宣言）では、科学は人類全体に奉仕すべきものという認識の下、その利用についての十分な情報と民主的議論の必要性が説かれ、知の公開、共有へ向けての指針が示されていた。国内でも「オープンイノベーション」「オープンサイエンス」の文字を見ることが多くなり、国文研でも「オープンサイエンスとデータ駆動型研究」が推進されていく。古典籍は「情報資源」となり、これを諸科学と協働することにより期待される未来は、「データ駆動による課題解決型人文学の創成」である。ネット環境の整備によって、地球はすっかり小さくなったような錯覚を覚えるが、古典籍のデジタルデータ化は、時間をも縮めて、過去の検索を容易にした。

国文学の研究領域のみならず、隣接領域も含め国内外の膨大なデータが卓上で閲覧可能となり、今や、その恩恵を受けない日はない。国文研への「来館者」数は、館が提供しているサイトへのアクセス数が利用の実体を示すようになり、事実、人々が在宅を余儀なくされたコロナ禍下にあっても、国文研は利用者数を飛躍的に増やした。

これは、国文研が長い年月をかけて整備してきた国書データベースなどの典籍データの研究資源化が、「人類全体」での知の共有を実現するための営為であったことを示している。

かくして、世は「デジタル」「データ」高速社会を邁進している。ところで、レコード盤からCDで音楽を聴くようになった大学院生時代、ドットを繋いだような異質な音を耳は聞き分けたが、取り扱いの便利さから専らこれに頼るようになった。捨てたレコード盤の音源をストリーミングサービスで見つけては今も聴いてみるが、やはり違和感を拭えない。そうでありながら、もはや元のレコードの音を思い出すことはできないのが、何より悲しい。この感覚はノスタルジーといった、微温のものではない。

スローフードはファストフードに対して生まれた運動理念のようであるが、人は便利を手に入れる代わりに失った大事なものに気づき、これを取り戻したいと切望している。現代に生きる私たちには、文化財である古典籍を保全し、次世代へ継承していく使命があるが、古典籍の伝承とは、単にデータを収集保存し公開することではない。私は能や狂言を研究しているが、能や狂言は先代からその真髄を受け継ぎ、体現し、次世代に伝えることで命脈を保ってきた。これを体得し、伝えることができる人が絶えてしまえば、そこで能や狂言は絶える。古典籍とて同じであろう。古典の価値を認める能力を人類が失った時、私たちは古典籍というかけがえのない文化財を真の意味で失うことになる。

文学はデータではない。古典籍はデータ化できても、データは古典籍の全き姿ではない。これを書いた人、これを読み伝えてきた人々の「心」の結晶である。このことを履き違えた時、私たちは文化の破壊者ともなるであろう。古典の読解には高度な修練を必要とする。古典籍を読み伝えることができる研究者をもっと育成する必要がある。研究者枯渇がもたらす痩せ細った未来を回避するためには、これにも十分な予算が充てられなければならない。先人の記憶と知の集積である古典の読解は、過去への固執や逃避ではなく、「今」を知るために、古典籍を智慧として生かす模索であり、この営みを全き形で継承できるのは、人でしかないのだから。

本の“守り人”たち

横溝 博（国文学研究資料館学術資料委員会委員、東北大学大学院文学研究科教授）

◆書誌調査とはじめ

日本文学研究においては、原典の探索は必要不可欠のものであるでしょう。とくに翻刻されていない文学テキストや、全集に収められていない作品などは、写本や刊本、初出誌の探索が、研究の手段として否応なく求められるものです。私は王朝物語を専門としていますが、対象となる作品が平安末期から中世にかけて創作されたテキストとあって、未翻刻の写本が多いことから、どうしても原本の調査研究が必要となってきます。

ふりかえってみますと、はじめての原本閲覧は、大学院の書誌学の授業で課題として提示された本の調査のために出かけた宮内庁書陵部でした。初心者には敷居が高いと身構えたものでしたが、職員の方には懇切に対応していただき、どうにか書誌らしきものをもって安堵したことを覚えています。その場では、観察力をはたらかせて、本に関するあらゆる情報を収集したつもりが、いざ持ち帰ってみると、見落としが多いことに気がついて、書誌調査が一筋縄ではいかないことを思い知らされました。その後は、東京都立図書館や国立国会図書館、国立公文書館などにも足を運んで、「習うより慣れる」という意気込みで、書誌調査のフィールドワークを続けたものです。それがどれほどの訓練になったかはわかりませんが、まさしく自分の研究のために書誌調査にはじめて赴いたのは、東京駒場にある前田尊経閣文庫でした。修士論文の執筆のために、そのころ取り組んでいた『いはでしのぶ』の諸本調査の必要に迫られてのことです（平成9年のことでした）。年が改まったばかりの、雪が降りこめる寒い時期でした。昭和初期の洋風建築である尊経閣文庫のドアをくぐり、閲覧室に着席して、本が書庫から運ばれてくるのを、今か今かと待っていた時の気持ちはいまだに忘れられません。それは前田綱紀が監督して右筆5名に書写させた本で、年代も明らかな由緒ある本でした。私は差し出されたその本を前にして、すぐには手がのびませんでした。はたして自分より前にこの本を開いたのは、いつ誰であったらうかと、しばし空想に耽ったものです。公表されているところが正しければ、それは戦前のことになるのでした。1ページずつ紙をめくりながら、私はこの本に外の空気を吸わせているように思われたものです。お昼には別室を暖めていただいて、そこで持参したお弁当を広げました。そうして午後の閲覧時間を使っても、書誌調査はまったく進みません。翻字もしているのですからなおさらです。通いつめて3日もした頃でした。

しょうか、とうとう見切りをつけて人生初となる紙焼写真を申し込みました。貴重な原本に触れているという感動もさることながら、尊経閣文庫の方にはとても深切にいただいたこともあって、閲覧のあいだも、文庫の職員の方が気になって仕方がなかったくらいです。このような場所で、古典籍とともに暮らし、出納する生活がどのようなのか、閲覧室という空間に居ながら考えたものでした。

私はどうも、書誌調査に赴きながら、そこで働く人たちのほうに気がとられてならないようです。ノートを開くと、几帳面に書誌情報が本のスケッチなどとともに記載されているのですが、そうした作業の手順についてまったく覚えていないのは、我ながら不思議なほどです。本の印象よりも、閲覧室の空間やそこで出会った職員の方々のたたずまいのほうに記憶に残っているのです。ちなみに前田家本の書誌調査の経験と、本づくりを実際に学んだことが、その頃公開された冷泉家時雨亭文庫蔵「いはでしのぶ」断簡の考察に大いに役立ちました。諸本の探索にこだわりつづけたゆえの僥倖であったかと思います。

◆蚕室のような書庫の空間

本の調査と閲覧にかかわって、いまでも心に残っているのは、島原図書館に併設される肥前嶋原松平文庫への訪問です。このときは、『源注』という松平文庫にのみ所蔵される『源氏物語』注釈書の調査を目的に訪れたのですが、はたしてその本を見た記憶はまったく残っていません。というのも、調査の記憶を消し去ってしまうくらいのある印象が胸をいっぱいにしたからでした。本を調査して何日ものことでしたか、いつも本を出納してくださる職員の方が声をかけてくださり、私を書庫へと案内してくださったのです。「本にお詳しい大学の先生だから、ここの本の管理がこれでよいかどうか、意見を聞かせてほしい」ということでした。じつはそのころ、私はまだポスドクの身分でした。古典籍の管理に口を出せるような知識も経験も持ち合わせていない人間だったわけですが、そのときはただ促されるままに書庫の中へと足を踏み入れました。するとどうでしょうか。案内された書庫の中は、想像していたような博物館然としたバックヤードなどではなく、木で作り付けられた棚が等間隔に整然と立て並べられているだけの質素な空間でした。何段かの棚に本が平置きで並べられていて、ぎっしり本が詰め込まれた書庫とはまるで様子が異なって見えます。本にしても、置かれているというよりは、しずかに横たえら

れているといったほうがぴったりくるような素朴な風景でした。私は本が並べられた木の棚のあいだを、職員の方の後ろについてまわりながら、書庫の内部がとある光景に似ていることに思い至りました。その部屋全体のしつらいは、書庫というよりほとんど蚕室と呼ぶに等しかったのです。職員の方は、試行錯誤しながら迷い迷い本の保存に気をくだしていると説明されました。正直、その空間は、古典籍を所蔵する場所としてはあまりに素朴にすぎ、素人目にもあやうさを感じさせるものでした。しかし、職員の方の本への気の配りようを伺うにつれて、これが本にとっては理想的で倅せな空間だと思えるようになりました。職員の方々がほんとうに本を大切に扱われていることを知って、私にはこの部屋に置かれている本が、蚕さながらに呼吸をしているのを感じとったのです。本を虫にたとえろとは思議なことですが、職員の方々のやさしい手つきとゆわりによって、それらの本は守られていると直感し、胸がつまったものです。「これでじゅうぶんではないでしょうか。なにより本にとっては、日常的に人の手に触れ、紙のあいだを風が通るようにするのがよいのですから」。私はもっともらしいことを言ったのですが、その時の職員の方の安堵した表情が忘れられません。もちろん、私は蚕室などというものを、体験としても知識としても持ち合わせているわけではないのですが、職員の方々のお話を聞くと、そのように思われてならないのでした。

◆本に接するというこ

いまは東北大学に勤めていることもあって、附属図書館の古典籍に触れる機会が多くなりました。2011年3月11日に発生した東日本大震災では、附属図書館も被災し、貴重書庫の古典籍も影響を受けました。さらには、東日本大震災の傷跡も癒えたかと思われた2022年3月16日未明に起きた大地震で、おびただしい数の本が書架から落下しました。書架には地震時の揺れに反応して、自動的に5度の傾斜がつくように設計されていたのですが、それでも本の突出を防ぐことはできませんでした。目を覆うばかりの惨状でしたが、そうした中であって、比較的古典籍類の損傷が軽微ですんだのは、帙に嚴重に守られていたからでした。伝統的な本の装訂や保管技術が功を奏したことを目の当たりにしました。とはいえ、落下した書物を拾い上げ、もとのとおり配架し直すのは、損傷具合の確認とともにたいへん骨が折れるものでした。対応された図書館職員



窺源抄、国文学研究資料館・初雁文庫蔵、12-534-1

の方にはほんとうに頭が下がります。地震大国日本ですから、これからは耐震・免震機構を備えた書架の開発などにも目が向けられることになるでしょう。東北大学附属図書館は貴重書の宝庫で、三条西公条(1487-1563)の自筆稿本などに触れていると、室町時代の一縉紳の生活が目に見えるよう浮かんでくるようです。いま私は東北大学附属図書館に所蔵されている『窺原鈔』という、江戸時代の『源氏物語』注釈書の調査・研究に取り組んでいます。著者である石出常軒(1615-1689)は牢屋奉行を家職として務めた人で、俳諧に手を染め紀行文をものすなど、文事にあかるい人だったようです。全62冊という浩瀚な書物ですが、全巻揃っているのは東北大本のみで、途中までの書写本が内閣文庫にあります。また、内閣文庫本の写しが、国文学研究資料館初雁文庫と相愛大学桃園文庫にあります。とくに東日本大震災の年の夏、『窺原鈔』について報告を予定していた私は、東北大本の閲覧がかなわないなか、国文学研究資料館のWEB上で公開されていた西下経一博士らによる手沢本の画像に大いに助けられました。新写本の恩恵というのを痛切に感じたときでもありました。

研究者とは、善本をもとめ、あるいは未知の異文をもつ写本を探索するのが生業でもあります。ゆえに、どうしても研究上の水準で諸本を価値づけてしまいがちです。しかし、たとえ伝本の多い作品で、いわゆる流布本や末流本のたぐいであったとしても、それら一つ一つが伝わっていることの歴史的・文化的価値はゆるぎないものであると思います。それらの本を大切に扱い、守り伝えてきた人びとの存在に思いをいたしたいものです。そして、所蔵先で本を閲覧する際には、そこで本を扱う方々の気持ちに立って本に触れることを礼儀とし、それにふさわしい所作を身につけたいものだ、いままなお心がけています。

自筆資料の楽しみ

堀川 貴司（国文学研究資料館共同研究委員会委員、慶應義塾大学附属研究所所道文庫長・教授）

ここ数年、非常勤先の授業で大学院生の皆さんと近世漢詩人の自筆資料を読んでいます。資料のさまざまな形態を知る、という目的から、掛軸（半切などの大きなもの）、懐紙や詩箋の類、また短冊などを取り上げたり、書簡も、卷子本に装訂されたもの、折りたたまれた原態のもの、あるいは掛軸や貼交屏風に仕立てられた後、切られたもの（いわゆるマクリ）などを扱ってきました。

◆モノとしての資料

自筆資料はできるだけウブな状態であることが望ましいのですが、現実には鑑賞用としてさまざまな加工が施されている場合があります。たとえば書簡の場合、縦15センチ程度に切られた紙を継いで書かれ、書き終わると末尾から文面を内側にしてくるくると冒頭に向かって巻いていき、最後に冒頭裏側（端裏）に宛名と署名を記す、という形式がよくあります。それを卷子本や掛軸に表装する場合、端裏が見えないので、そこを切断して裏返し、冒頭か末尾に接続させるという措置が取られます。現存する資料がそういった加工を経ている場合があることを、私物であれば教室に持ち込んで、実見してもらうこともできます。

ただ、それはそれとして、やはり大事なのは中味なので、文字を読み、内容を理解する、という作業が授業の中心です。

◆漢詩文の模刻を読む

2023年度の前半は、なるべくまとまった資料を読もうと思い、まず『儒林墨宝』という模刻本を取り上げました。藤原惺窩から始まって林家の代々や、その周辺の学者たちの筆跡が拓本摺で再現された折本仕立の一帖です。授業では、たまたま入手できた第一巻の最初の数名分だけを読んだのですが、全部で四巻四帖あり、第二巻は木下順庵とその門下、第三巻は彰考館関係、第四巻は荻生徂徠とその門下、というふうに、江戸中期までの代表的な流派を網羅しています（書誌・全目録は西尾市岩瀬文庫古典籍書誌データベースで、内容そのものは早稲田大学図書館古典籍データベースと国立国会図書館デジタルコレクションで御覧になれます）。編者は榊原月堂（1798～1858）という幕臣で書家、また書画のコレクションで知られた人らしく、模刻したのはほとんどが架蔵資料であったといえます。各巻序文も林檎宇・松崎謙堂・佐藤一斎・古賀侗庵という錚々たる顔ぶれで、これは編者の地位と交友のなせる業でしょう。冒頭は藤原惺窩の林羅山宛漢文体書簡で、羅山自身が編

集した『惺窩文集』、また冷泉為経編・徳川光圀校『惺窩先生文集』の両方に収めますが、模刻とは細部に異同があります。『大日本史料』第十二編之三十一にも「土肥慶蔵氏所蔵文書」として原本の翻刻を掲載、『鶚軒先生遺稿』上「史伝渉筆」にも架蔵資料として引用されています。近世初期の書簡がまさか『大日本史料』に載っているとは、なかなか思いつかなかったのですが、土肥慶蔵の著作ともども、先ほども触れた国立国会図書館デジタルコレクションで検索して見つけました。このデータベースはテキスト検索機能が付加されたことで、原資料のみならず、国文学論文目録データベースやCiNii Articlesといった研究文献のデータベースでは検索できない研究・エッセイの類を現代に蘇らせる効用も生まれました。大いに活用すべきでしょう。

この書簡には、林家門人で川越藩儒の関松窓が記した天明三年（一七八三）の識語も付いていて、そのときは「高木君」なる人物の所有だったといえます。ついで榊原月堂、近代には鶚軒土肥慶蔵と所有者が移り変わっていったことがわかります（現存不明）。旧蔵者と時空を超えて思いを共有することもまた、自筆資料を扱う醍醐味でしょう。

◆唐金梅所宛書簡を読む

後半は趣向を変えて、東京古典会の大入礼会で運良く入手できた書簡集『与唐金興隆諸家手翰』（原資料には誤って「隆興」とあるのを訂正した）を読みました。江戸中期、泉佐野の豪商で文人として知られた唐金梅所に宛てられた書簡を卷子本に仕立てたものです。

冒頭に「袖裏碎錦」という四字句が大字で記され、落款「古橋山人」落款印「苟簡」があります。この筆者は讃岐高松の豪商後藤漆谷（1749～1831）であると知られます。菅茶山らとの交友もあった人で、同じ立場の梅所への共感もあり、丁寧に表装し愛蔵していたのでしょう。冒頭に新井白石、ついで伊藤東涯・壺井義知（有職故実家）・知空（浄土真宗本願寺派の学僧）・佐々木海山（書家）・松軒（伝不明）・貞松（伝不明、歌人か）・松本重文（会津藩儒）の全八通を収めています。

白石の書簡は、梅所から送られてきた詩稿への感想を述べたもので、言及される作品は享保5年（1720）頃刊行された『梅所詩稿』所収詩であるところから、出版準備としてまず白石に添削を求めたのでしょう。刊本には黄檗僧で徂徠とも親しかった大瀬元階の批点が付されていますが、それ以前にこういう段階があったことがわかります。白石

は室鳩巢宛の書簡（『新井白石全集』所収）で、梅所から矢継ぎ早の添削依頼に嫌気がさすとこぼしているのですが、この書簡ではべた褒めしつつも改善案を示すという丁寧な対応をしています。失脚後で時間的余裕が生まれたからでしょうか。

最後にある松本重文の書簡は、藩重臣の西郷頼母からの依頼で、彼が作った「徜徉亭」なる別邸からの風景を、当時有名な詩人たちに詩に詠んでもらいたいの、梅所にその取り次ぎをお願いしたい、については白石・鳩巢ほか10名に、絵図を1枚ずつ配ってくれ、と言っています。ずいぶん虫のいい話ですが、それだけ梅所の名は全国に鳴り響いていたのでしょう。

書簡の読解は、版本・写本で見慣れたくずし字以外に独特の省略や用字があるため、もう一段階難しいのですが、その読解能力は、少なくとも近世文学の研究には欠かせないものでしょう。そう思って修士に入ったばかり（あるいは学部4年）の学生さんにも分担してもらいました。読んでみてそれぞれに面白い内容だったので、授業だけで終わらせるのはもったいないと思っていたのですが、幸い池澤一郎氏のご厚意により、氏が編集を行っている雑誌に翻刻を掲載していただけることになりました（『近世文芸 研究と評論』第105号、2023年11月）。今後の研究の参考になれば幸いです。

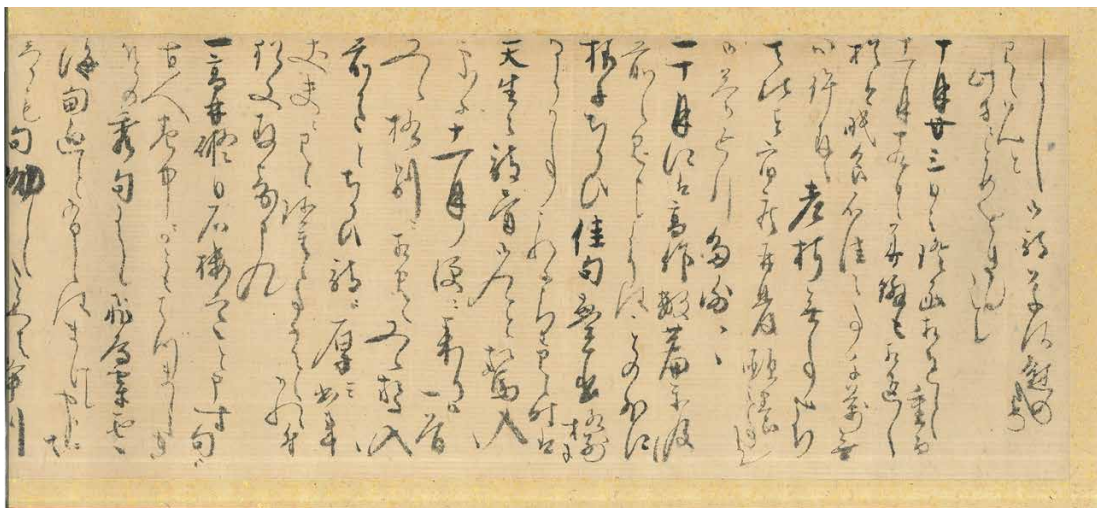
◆研究における「うたげと孤心」

振り返れば、書簡の読解に本格的に取り組んだのは、愛知県立女子短大に赴任して塩村耕氏が主宰する「名古屋手

紙の会」に参加した1996年のことですから、もう四半世紀前になります。そこから自分でも資料を買い求めたりしながら勉強し、先述の梅所に関する論文や書簡の翻刻を『東海近世』に載せていただきました。その後も授業や私的な研究会で細々と書簡や漢詩文自筆資料の読解を続けています。もちろん、一人で読んでも面白いのですが、実物を前にして、ああでもないこうでもない、数人の気心の知れた研究仲間や学生さんと顔を突き合わせて読んでいく、というのがやはり楽しい勉強になります。書簡は、どんなに読みやすいものでも、なぜか1カ所は必ず読めない（読みにくい）ところがあったり、その日の調子によって読めたり読めなかったりといったことが起きたりします。複数の目で見ることが大事だと実感するのはそういう時です。大岡信が喝破した「うたげと孤心」は、研究にも当てはまるでしょう。

◆いざ共同研究へ

こういった資料を読む研究会が営々と続けられている大学や地域は恵まれています。そうでないところで研究を志す人は、国文研の共同研究という便利な制度を利用して、さまざまな出身・専門の研究者と交流を図るのが得策です。私もまだ30歳になったばかりのころ、深沢眞二氏（当時国文研助手）から誘われて「雄長老の学芸」に参加したことが、今から振り返るとその後の自分の研究を進める大きな力となり、つい最近も雄長老の漢文作品を読む論文を書いたところ。若い人には是非、貴重な機会を生かして知見を広げていただければと思います。



唐金梅所宛新井白石書簡（冒頭部分）

渡部泰明館長 紫綬褒章を受章

渡部泰明館長には、2023年秋の褒章にて栄えある紫綬褒章を受章されました。独創的な視座のもとに中世和歌史の動態を具体的に解明するなど、積年にわたる和歌史研究を通して学界に多大なる貢献を果たしてきた功績が認められたものです。また2021年度からは、国文学研究資料館長として、日本文学をはじめとする人文科学全般にわたる学術の基盤整備を牽引されています。去る11月13日(月)にはホテル椿山荘東京で伝達式が行われ、皇居にて天皇に拝謁されました。続く11月22日(水)にはホテルエミシア東京立川にて、渡部泰明館長紫綬褒章受章記念祝賀会が開かれました。久富木原玲愛知県立大学長(当館運営委員)の乾杯の御発声ののち、高田祐彦青山学院大学教授(同)ほか5名の方々の祝辞があり、さらに静岡県富士山世界遺産セ



ほいよう
館長
着用写真

ンターの遠山敦子館長、野田地^{M A P}図主宰の劇作家野田秀樹さま、野上記念法政大学能楽研究所の山中玲子教授ほかの祝電が披露され、50名に及ぶ参集者の皆さまとともに今般の栄誉をお祝いしました。国文研の教職員ひとりとして忘れ難い立川の一夜でした。

(入口 敦志・神作 研一)



集合写真(渡部泰明館長紫綬褒章受章記念祝賀会)

第16回日本古典文学学術賞受賞者発表

「日本古典文学学術賞」は、財団法人日本古典文学会が主催していた「日本古典文学会賞」を継承し、若手日本古典文学研究者の奨励と援助を目的として、国文学研究資料館賛助会に設置されました。2023年で第16回を迎えます。受賞対象者は、対象となる業績の公表時に40歳未満である研究者です(3名以内)。

今回は、2022年1月～12月までの著書を対象とし、

■ 第16回日本古典文学学術賞受賞者

三宅 宏幸(同志社大学文学部 准教授)

研究業績：『馬琴研究—読本の生成と周縁—』汲古書院

■ 第16回日本古典文学学術賞 選考委員会委員

上野 誠(上代文学会/國學院大学特別専任教授)

河添 房江(中古文学会/東京学芸大学名誉教授)

荒木 浩(中世文学会/国際日本文化研究センター教授) ※委員長

久保田啓一(日本近世文学会/広島大学教授)

久保木秀夫(和歌文学会/日本大学教授)

入口 敦志(国文学研究資料館賛助会運営委員会委員長・同館副館長)

岡崎真紀子(国文学研究資料館教授)

選考委員会における選考の結果、1名の受賞者が決定いたしました。

授賞式は、10月20日(金)に当館大会議室で執り行われ、荒木委員長から選考経過報告、久保田委員による講評、そして、受賞者に賞状と副賞が授与され、当館の渡部館長からお祝いの言葉が贈られました。



これまでの受賞者・選考講評などの情報は、
当館ウェブサイト日本古典文学学術賞ページを御覧ください。
<https://www.nijl.ac.jp/outline/gakujyutusyoku.html>

第16回日本古典文学学術賞選考講評

三宅宏幸氏『馬琴研究—読本の生成と周縁—』
(汲古書院、2022年2月刊)

実証を旨とする近世文学研究において、典拠論に大きな価値を見出そうとするのは、研究者すべてに共有された立場であろう。特に、該博な知識を縦横に駆使して後期読本の代表作を陸続と生み出した曲亭馬琴のような作者に対しては、有効な方法として定着する。先行の典拠論に誠意をもって接しつつ、細部にわたる凝視をもって明確な前進の跡を示した本書は、馬琴研究に新たな段階を招来した名著として、確かな位置を占める。

序章は、本書の目的や先行研究の整理を主とするが、中に『月氷奇縁』の典拠論を組み入れることにより、本書の狙いと方法を見本として提示して見せる。この具体的な導きがあって、読者は厩大な情報を辿る道筋を見通すことができる。

第一部「馬琴読本の典拠」では、先行論で指摘された典拠では説明できない細かな差異を丁寧に汲み上げ、それらをすべて説明できる新たな典拠を持ち出すという形式で、『椿説弓張月』以下の諸作を論じてゆく。表現の細部には拘らず話の大枠の設定や趣向の説明の段階に留まっていた先行論の立ち位置を鮮やかに超越する爽快感を読者は抱くことができる。しかも、『通俗武王軍談』『肉蒲団』『封神演義』などの典拠がさまざまに組み合わせられて読本創作に活かされる過程が具体的に再現されるので、読者はあたかも馬琴の書齋に身を置いて彼の折々の息遣いまでを身近に感じながら、著者の言葉を借りれば「重層的」な典拠利用の現場に立ち会うことになる。本書の極めて優れる点の一つであろう。

第二部「馬琴読本の図像と形象」では、読本の本文から挿絵・口絵へと、著者の緻密な観察が振り向けられる。しかも表現と図像の双方が著者の主張の妥当性を支え合うので、読者は聖徳太子伝承の利用や馬琴と北斎の齟齬の実態を如実に実感することができる。

第三部「馬琴の考証・批評と読本」は、『燕石雑誌』以下の考証随筆や白話小説批評『半閑窓談』などを、馬琴の読本との前後関係を厳密に検証しながら関連させる諸論から成る。大雑把な割り切り方では満足しない著者のこだわりが見て取れる。

第四部「馬琴の交流とその周辺」は、『自撰自集雑稿』諸本の吟味から始まり、馬琴自筆とされてきた伝本に疑問を呈して、そこから岳亭丘山や書肆大阪屋茂吉との関係を読み解き、さらに『自撰自集雑稿』に概略の載る扇面や短冊の実物の写真を数多く掲げて馬琴の伝記研究の精度を大幅に高める前半の論と、木村黙老との関係を多角的に検討し、黙老の蔵書目録の掲出に必然性を持たせた後半の論によって構成される。伝本研究と伝記研究を見事に融合させ、さらには馬琴をめぐる文壇研究へと発展させてゆく過程が非常に興味深い。

終章は、序章以来の論述の流れを簡潔にまとめ、一書としての整合性を明確に持たせた。論文の雑多な集成とは全く水準を異にする、理想的な研究書のありようを示す。

以上の評価のもと、選考委員会は満場一致で三宅宏幸氏に日本古典文学学術賞を授与することに決した。

(文責 久保田 啓一)

人と機械がアタマをつきあわせて —「総合書物学」のいま—

古典籍をはじめとする書物の総合的な把握を目指すべく、2022年度から開始された基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の拡張的研究」(以下、「総合書物学」)は、国文学研究資料館(「古活字版の組成・版面パターンの情報工学的解析」)・国立歴史民俗博物館(「延喜式のデジタル化技術による汎用化」)・国立国語研究所(「古辞書類に基づく語彙資源の拡張と語彙・表記の史的変遷」)の3つのユニットから形成されています。このうち国文研ユニットでは、当館が推進するデジタル化事業と足並みをそろえながら、館内外の多分野にまたがる研究者や院生10数名がつどい研究を進めています。

具体的には、日本の印刷史の中でも際立った特異性を有する古活字版、とりわけ嵯峨本を最新のAIによるパターン学習の技術を用いることにより、活字の組み方(組成)と版面を情報工学的に解析し、タイトルごとの精緻な書誌情報を集積しています。この過程で、研究そのものの推進はもちろんのこと、入力した任意の文字列を嵯峨本から切り出した活字の画像に変換・出力する「そあん(soan)」(ROIS-DS人文学オープンデータ共同利用センター)というサービスもリリースされ、今後のくずし字学習やデジタル画像の利用方法として高い注目を集めています(図1)。また、機械による古活字版のグリッド解析を通して、文字配列の美しさの解明に迫る試みも行っているほか、プロジェクトメンバーの1人である北本朝展氏(ROIS-DS人文学オープンデータ共同利用センター・国立情報学研究所)が開発した「差読(Differential Reading)のための画像照合サービス」を用い、古典籍のデジタル画像同士を重ねて比較する、という新しい方法による同版・異版の調査なども実施しています。

「総合書物学」では、年2回の共同研究会に加えて、こうした活動や研究成果を研究者コミュニティのみならず、周辺領域にも周知するイベントを開催しています。2023年8月9日には、プロジェクトメンバーの北本氏に加え、カラーヌワット・タリン氏(Google)、太田梨紗子氏(神戸大学大学院・京都市京セラ美術館(非))、インターンシップとして来日していた学生のYuxiao Li氏(スイス連邦工科大学ローザンヌ校)とIrene Gentilini氏(ポローニャ大学)をお招きし、

総合書物学シンポジウム2023「印刷をめぐる多角的なアプローチ」をキャンパスプラザ京都で開催しました(図2)。

このように、当プロジェクトでは新たなる時代のデジタルヒューマニティーズ(DH)の成果を適宜取り込みつつ、従来の国文学研究の方法とは異なるアプローチによる実証性を探求する一方、こうした取組のプロセスがDHの技術にフィードバックされることで、それぞれの研究が二人三脚で進むことを目指しています。

以上のことは、総合研究大学院大学における授業科目「総合書物論」の授業内容とも連動しており、最先端の実験的な試みや方法論などを教育において伝えていくことも、当プロジェクトの大きな特色です。

(木越 俊介・松永 瑠成)

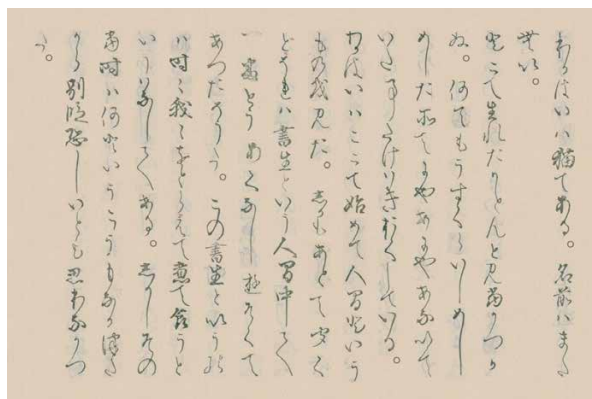


図1 「そあん(soan)」で生成した
夏目漱石『吾輩は猫である』の冒頭



図2 総合書物学シンポジウム2023
「印刷をめぐる多角的なアプローチ」

人文機構広領域連携型基幹研究プロジェクト国文研ユニット 「人口減少地域におけるアーカイブズと歴史文化の再構築」

2023年度より人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「横断的・融合的地域文化研究の領域展開：新たな社会の創発を目指して」の国文学研究資料館ユニット「人口減少地域におけるアーカイブズと歴史文化の再構築」がスタートしました。この共同研究の中でも東京電力福島第一原子力発電所事故で被災した福島県浜通り地域で進めている研究とその成果、地域への還元について三つの自治体と行っている内容について簡単に述べたいと思います。

①浪江町。現在でも町域の8割が帰還困難区域（一部は特定復興再生拠点）ですが、一方で町の中心地は「創造的復興」のために多くの歴史資料や文化財が散逸しています。そこで、浪江町教育委員会とともに歴史資料の保全を地域の人びとに呼びかけるため、「浪江を語ろう」というイベントを年に4回開催しました。具体的には浪江町出身の方がたに町の思い出を語ってもらったり、保全した歴史資料の紹介、それらの古文書を修復した東洋美術学校保存修復科学生の報告などです。また、解体除染した谷津田地区の古文書の目録作成や帰還困難区域である小丸地区の仏具の保全作業なども行っています。

②大熊町。東京電力福島第一原子力発電所が立地する自治体で、復興のための解体除染が進行しています（1号機から4号機。5号機・6号機は双葉町）。大熊町教育総務課と連携して解体除染に伴う歴史資料の保全活動を行い、現在では熊地区から保全した古文書の目録化をしています。その成果については内閣府などが実行委員会を務めた「ぼうさいこくたい2023」のポスターセッションで「原子力災害被災地域の歴史資料の保存と自治体・住民との共有」「謎の災害被害の古文書の発見」という内容を研究分担者の大関真由美氏・菅井優士氏とともに発表しました。これらの研究成果を地域の人びとと共有するために筆者のYouTubeチャンネルで毎日紹介しています（西村慎太郎チャンネル「毎日古文書DAY」）。

③富岡町。今年度、富岡町とは学术交流・協力に関する基本協定を締結しました。すでに富岡町とのつながりは古く、筆者は富岡町アーカイブ施設整備識者検討部会委員として、「とみおかアーカイブ・ミュージアム」建設にたずさわわり、町内の帰還困難区域である小

良ヶ浜地区の大字誌『小良ヶ浜』の執筆も行いました。昨年度はアーカイブズ・カレッジ短期コースの開催、シンポジウムを開催することができました。今回の研究協定締結に基づきまして、10月には未整理だった上手岡地区の古文書の目録作成を行い、11月には「災害被災地を継承する生活誌を目指して—保全・研究・活用の地平—」趣旨説明を開催しました。

今後とも東京電力福島第一原子力発電所事故被災地での調査・研究を進めていきますので、その成果にご期待ください。（西村 慎太郎）



「ぼうさいこくたい2023」ポスター



浪江町帰還困難区域での仏像・棟札保全作業
(2023年5月12日)

福島県富岡町と当館とで学術交流・協力に関する基本協定を締結

富岡町とは、福島県浜通りの自治体で、東日本大震災で大きな被害を受け、東京電力福島第一原子力発電所事故によって、全町避難となり、現在でも立ち入りが制限されている帰還困難区域を抱える自治体です。当館との関わりですと、人文機構広領域連携型基幹研究プロジェクト国文研ユニット「人命環境アーカイブズの過去・現在・未来に関する双方向的研究」(2017年度～2022年度)や当館基幹研究「地方協創によるアーカイブズ保全・活用システム構築に関する研究」(2019年度～2022年度)において、共同研究や歴史資料レスキューなどを行いました。昨年度はとみおかアーカイブ・ミュージアムや富岡町文化交流センター「学びの森」においてアーカイブズ・カレッジ短期コースやシンポジウムの開催をしています。

今後のさらなる共同研究を推進するために、学術・協力に関する基本協定を結ぶこととし、2023年7月26日、福島県双葉郡富岡町と当館との間で学術交流・協力に関する基本協定が締結されました。調印式は富岡

町文化交流センター「学びの森」で開催され、富岡町の山本育男町長と当館の渡部泰明館長が協定にサインをしました。



基本協定を受けて、10月18日～20日にかけて、未整理古文書の整理作業を行い、また、11月25日にはシンポジウム「災害被災地を継承する生活誌を目指して―保全・研究・活用の地平―」も開催しました。今後、調査・研究を進めるとともに、富岡町の復興を後押しできるように努めたいと思います。

なお、今回の基本協定に調印に当たっては、とみおかアーカイブ・ミュージアム学芸員の門馬健氏をはじめとして、同館の皆さまには大変お世話になりました。御礼申し上げます。(西村 慎太郎)

日本古典籍講習会 ― 4年ぶりの対面開催 ―

2023年7月11日(火)・12日(水)の2日間にわたって、「第6回若手研究者を対象とした日本古典籍講習会」が開催されました。本講習会は、若手研究者(大学院在籍者または大学院修了後5年以内の研究者)が日本古典籍書誌学の初歩的な知識を修得することを目的としたもので、今年度は関東・関西を中心に約20名の若手研究者が参加しました。なお、新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、2020年度は中止、2021・2022年度はZoomによるオンラインリアルタイム配信での実施となっていたため、対面での開催は2019年度以来、実に4年ぶりとなりました。

多くの講義で、講師所有の古典籍や国文学研究資料館の蔵書・貴重書に触れる機会が設けられました。説明を受けた後、実際に古典籍を手にとってみることで、講義内容の理解がより一層深まりました。こういった活動は、昨年までのオンライン開催では叶わなかったもので、古典籍に触れられるありがたさを噛みしめるとともに、世の中がコロナ禍以前の状態に戻りつつあることを実感しました。2日目のプログラムには、国文研の書庫の見学が含まれていました。普段は館外の利用者が書

庫に立ち入ることはできず、書庫資料は請求によって閲覧することになっているため、書庫見学は非常に貴重な経験となった



落合博志教授の講義では複製本をOHCで投影しながら装訂について説明

のではないのでしょうか。また、古典籍の基本知識が学べる展示「和書のさまざま」(会期：2023年3月1日～7月24日)の開催期間中であったこともあり、受講生は昼休み等を利用して、講習会で学んだ知識を反芻しながら展示を閲覧していました。

本講習会は、所属機関を異にする若手研究者が一同に集まったため、交流の場ともなりました。これも対面開催ならではの醍醐味と言えるでしょう。専門が異なる研究者と繋がることができ、学会とはまた違った雰囲気味わうことができたように思います。

(総合研究大学院大学先端術院先端術専攻
日本文学研究コース博士後期課程 坂井 彪)

岡山県立博物館テーマ展「正宗敦夫と正宗文庫」展観記

2023年9月9日から10月15日まで、岡山県立博物館で「正宗敦夫と正宗文庫」展が開催されました。正宗敦夫(1881-1958)が蒐集と保存に努めた古典籍類が、こうした形で披露されるためには、主催の岡山県教育委員会・岡山県立博物館に加えて、共催の一般財団法人正宗文庫、就実大学人文科学部、国文学研究資料館という四者間の安定した協力体制が必須だったと思われます。この度のことは、正宗敦夫の顕彰はもちろん、地域資料の価値や意義、また、共同研究の成果としてそれらを示す方法を拓くという面でも、意義深い出来事であったと感じています。いま、「地域資料」と書きましたが、その内容は、それぞれの場所を物語るものであると同時に、広く日本文学・文化に向けて開かれています。今回のテーマ展はそのことを可視化していました。

展示の流れに沿えば、まず、岡山県備前市に今も続く正宗家という「家」や、「伊里村(現備前市穂浪)」を物語るもの、次に、敦夫自身が打ち込んだ、短歌雑誌や古典籍の出版事業に関する貴重な資料が陳列されました。なかでも、敦夫が20年以上の歳月をかけて独力で完成させた『万葉集総索引』関係資料は、短冊帖(語彙を書き抜いた短冊を貼り付けた冊子)・自筆原稿・朱入れされた校正紙の現物が示されました。敦夫の書き込みの細やかさや、現物の圧倒的な物量には、研究する者としての自らを顧みざるをえないような説得力がありました。

展示の後半では、熊沢蕃山や湯浅常山といった儒学者に関わる重要な資料の数々が示され、敦夫が郷土に向けた視線だけでなく、学問を重んじる岡山の風土そのものが映し出されていました。さらに、俱舎論首義や古活字版源氏物語などの稀覯本、善本が並び、蒐集家としての敦夫の目の確かさも示されました。また、伊藤若冲「花鳥版画」(椿に白頭図)、岡山ゆかりの桃太郎の英訳本『Momotaro』(縮緬本)など、国文学研究資料館所蔵のものも展示され、岡山や正宗文庫と国文研との連携が、よい形で発信されたのではないかと思います。

テーマ展の会期初日には、第3回正宗文庫セミナーも開催されました。基調講演に石川一氏(県立広島大学名誉教授)を迎え、「正宗家における学問の系譜」というタイトルでご講演いただきました。続いて、新美哲彦氏(早稲田大学教授)「正宗白鳥の『源氏物語』評価と正宗敦夫の『源氏物語』蒐集」、長福香菜氏(和歌山大学准教授)「常磐会」と正宗敦夫―井上通泰との

関わりから―と、共同研究メンバー2名の講演が叶いました。会期2日目には川崎剛志共同研究代表(就実大学教授)と小川剛生氏(慶應義塾大学教授)がミニ講演とギャラリートークを行い、2日間とも地域の方々を中心に多数の参加がありました。

私は現在、国文学研究資料館の共同研究(特定研究・共同研究(地域資料))「正宗文庫の研究」(2022～2024年度)の末席に加えていただいています。日ごろ近現代文学を研究対象に据えている者として、中世、近世文学研究者の方々のお仕事に接し、資料調査の重要性を学ぶ日々です。

正宗文庫と国文研とは2002年から、岡山在勤の日本文学研究者の方々も含めた相互協力が叶い、文庫の整理と調査、また、資料の撮影が進められてきたと伺っています。ひとつの営みを続けることの難しさは、私が述べるまでもなく、多くの方が感じておられることでしょう。今回のテーマ展は、現在の共同研究だけでなく、むしろここまで繋いでくださった全ての方々の手による、大きな実りであると思います。これを終着地とせず、いかに継続・継承・発展していくか。次の課題は見えています。

(立教大学文学部准教授 尾崎 名津子)



岡山県立博物館、2023年度(令和5年度)テーマ展③
正宗敦夫と正宗文庫

会場：岡山県立博物館2階展示室
2023年9月9日(土)～10月15日(日)

開館時間：(9月)午前9時～午後6時
(10月)午前9時30分～午後5時

休館日：月曜日(月曜日が祝日の場合は開館、翌火曜日に休館)

入館料：大人250円、65歳以上120円、高校生以下無料

主催：岡山県教育委員会、岡山県立博物館
共催：(財)正宗文庫、就実大学人文科学部、人間文化研究機構国文学研究資料館

〒703-8257 岡山市北区後楽園1-5
TEL 086-272-1149 (代表) FAX 086-272-1150
<https://www.pref.okayama.jp/site/kenhaku/>

たましん地域貢献スペース展示 『源氏物語』の絵画を楽しむ 開催

2023年10月23日(月)から12月1日(金)まで、多摩信用金庫地域貢献スペース(たましん本店本部棟2階 北側通路)にて、企画展示『源氏物語』の絵画を楽しむを開催しました。地域貢献スペースとは、文化・芸術を中心とする多摩地域の魅力を発信すること、多摩信用金庫が多摩地域を拠点とした創作活動の発展に寄与することを目的として、美術系大学生や若手作家、社会貢献を行う団体むけに無償で提供している展示スペースです。今回の展示では、パネルで当館の取り組みを紹介するとともに、当館の名品の一つであり、クリアファイルのデザインにも採用されている『源氏物語団扇画帖』より、「若紫巻」「葵巻」「明石巻」「絵合巻」「玉鬘巻」「幻巻」の図(いずれも複製)を展示しました。

また、当館では、2025年1月に、共催展示として、たましん美術館を会場に特別展示を実施する予定です。展示では当館所蔵の『源氏物語』関連資料を展示



するとともに、多摩地域を拠点に活動してきた美術家による『源氏物語』を題材とした作品も展示します。今後、当館のホームページなどを通じて展示の準備状況についてお知らせいたしますので、ご期待ください。

(条 汐里)

2023年度アーカイブズ・カレッジ短期コースと講演会

2023年度アーカイブズ・カレッジ短期コースが、11月6日(月)から11日(土)の日程で、大分県大分市の「豊の国情報ライブラリー」において開催され、自治体職員や学芸員、大学院生など38名が参加しました。今回のカレッジは、2020年に実施したクラウドファンディングでご支援いただいた資金をもとに運営しています。ご支援いただいた方々には、この場をお借りして改めてお礼申し上げます。

大分県の諸機関と国文学研究資料館とは、2013年度から2021年度まで進められたマレガ・プロジェクトによって深い協力関係が培われてきました。戦前・戦中に大分に赴任したマリオ・マレガ神父は、豊後国(現大分県)臼杵藩の宗門方文書を中心とする日本近世のキリタン関係文書を収集し、1953年にこれらをバチカン図書館へ送りました。国文研や大分県立先哲史料館など構成されるマレガ・プロジェクトのメンバーは、数度にわたりバチカンを訪れて、これらの文書の整理・目録作成・保存措置を共同して進め、画像データベースを構築してプロジェクトのHPで公開しています(<https://www.nijl.ac.jp/pages/marega/>)。

こうした協働の実績を背景に、今回のアーカイブズ・カレッジ短期コースでも、大分県や大分県教育委員会による全面的な協力をいただき、円滑な運営を進める

ことができました。関係者の皆様にお礼申し上げたいと思います。

また、カレッジ終了後の11月12日(日)には、「地域の文化資源としてのアーカイブズ」をテーマにして講演会が開かれました。マレガ・プロジェクトを契機に国文研と学術交流協定を結んだ別府大学から講師をお招きし、飯沼賢司特任教授が「大分県における前近代史料残存の特色」、針谷武志教授が「地域資料の調査と保存」という演題で講演を行いました。

(太田 尚宏)



カレッジの様子



講演会の様子

「古典の日」講演会に参加して

2023年11月3日(金・祝日)、国文学研究資料館主催「古典の日」講演会が開催されました。今年度の講演は、張龍妹氏(北京外国語大学北京日本学研究中心教授)による「中国人学生からみた平安文学」、久保田淳氏(東京大学名誉教授)による「秀歌・名歌を考える」。

まず講演会の冒頭、渡部泰明館長の御挨拶があり、念願かなってこの講演会を実現できた喜びと、お二人の研究姿勢を「公」という概念で讃えておられたのが、印象的でした。

続いて、岡崎真紀子国文研教授より講師の紹介があり、待ちに待った講演が始まりました。張氏の講演は、中国で日本文学を教えている、よく聞かれる四つの質問をまず紹介し、その4点を柱に、中国と日本、時に韓国と比較しながら、日本の特性を浮かび上がらせていくという内容でした。まず1点目は、「清貧を恥じるのはなぜか」。例えば、『落窪物語』に衣服の粗末さを女君が恥じる箇所があり、清貧は美德であるはずなのに、理解できないという声があがるそうです。2点目は、『「限りあれば」の持つ意味は?』。『源氏物語』桐壺巻の「限りあれば」の用例などから、日本における帝の力の抑制、摂関家とのパワーバランス、中国の皇帝の権力との比較へと展開されました。3点目は、「なぜ奸臣がいないのか」。日本の古典文学には悪役がほとんど登場しないことが、とても不思議に映るそうです。これも、なるほどと思わされる御指摘でした。藤原道長と王莽を比較し、「正義」が流動的、相対的であるという本質的な提言は深く心に残りました。日本の和歌に述懐はあっても、諷諭がほとんどない、政治批判がないこととも関係があるかもしれません。4点目は、「なぜ古代日本女性の方がより優れた文学作品を残したのか」。その理由として、日本の当時の結婚制度(舅姑と同居しない)と「心象の文学」(日本)「経世の文学」(中国)という差異を挙げられました。張氏の講演を聴いて、これまで日常的に見馴れていた風景が、急に新鮮な色合いを帯びて立ち現れてきたような、そんな感動を覚



張氏

久保田氏

えたことでした。

その後、しばしの休憩をはさんで、久保田淳氏の講演が始まりました。とある「かるた大会」の場面の描写(『金色夜叉』)から始まって、練り抜かれた見事な構成、展開で最後まで圧倒され続けました。和歌文学研究の第一線を走り、学界を牽引してこられた氏が、今「秀歌・名歌」をどう定義づけるのだろうか、そんな期待がなかったわけではありませんが、氏は決して安易に答えを出してはくれません。それはあたかも、藤原俊成が『古来風体抄』において、秀歌とは何かを定義することなく、古来の秀歌を列挙することによって、秀歌とは何かを学び取らせる姿を彷彿とさせます。今回は、藤原定家と西行という二人の歌人を主な対象とし、定家については、「定家十二月」(『日本人の美意識』)のほか、「表現論から見た定家の歌十首<解説>」(『国文学解釈と教材の研究』26の16)、西行については、「西行十二月」(『日本人の美意識』)、「西行名歌五十選」(別冊太陽『西行 捨てて生きる』)と、これまで氏が発表してこられた二歌人の「秀歌選」がまとめて示されました。そして、「秀歌・名歌の定義は難しいが、読んでよかったという歌はたしかにある」「年齢を重ねてよいと思う歌も変わってくる」という思いを述べられ、今後、「定家五十選」も作成したいという希望で締めくくられました。

お二人の講演の後、聴衆のみなさんが晴れやかで満ち足りた表情をしていたのがとても印象的でした。あらためて心より感謝申し上げます。

(フェリス学院大学文学部日本語日本文学科教授 谷 知子)

久保田淳先生より古典籍をご寄贈いただきました

東京大学名誉教授・久保田淳先生よりご所蔵の『丹後守為忠家百首』『承安二年尚齒会図記』『俊成卿九十賀記』をご寄贈賜りました。研究成果を継承する資料として大切に保管し、デジタル公開等広く活用させていただきます。ありがとうございました。(海野 圭介)



俊成卿九十賀記

『この世界の片隅に』片瀨須直監督トークイベント 「つるばみ色のなぎ子たち ― 最新作『つるばみ色のなぎ子たち』と清少納言・枕草子・時代考証 ―」

2023年10月12日に、日本大学文理学部にて、日本大学国文学会と当館「ないじえる芸術共創ラボ」の協力の下、アニメーション映画監督の片瀨須直氏（当館AIR）・日本大学の久保木秀夫教授・当館の中西智子准教授によるトークイベントが開催されました。

第一部では、片瀨氏に『この世界の片隅に』『マイマイ新子と千年の魔法』などの作品を制作した際の貴重な資料群、特に風景描写のための綿密な考証の記録を詳しくご紹介いただきました。また現在制作中の最新作『つるばみ色のなぎ子たち』について、作品の舞台となる千年前の平安京に関する時代考証の楽しみやご苦労などをうかがうことができました。会場の大きなスクリーンには現在公開中のパイロットフィルムが映し出されました。千住明氏の美しい音楽と呼応する圧倒的な映像世界に魅了されたひとときでした。

第二部では参加者からの質問の時間を設けました。若い方々から次々に投げかけられる熱のこもった質問に対し、あえて死や穢れを題材とすることの意味や、清少納言や定子後宮の女性たちへの思い、アニメーション

制作時の「字コンテ」に近いと感じられる枕草子の文章への共感、日本の過去の風景に対する興味など、片瀨氏にたくさんのお答えをいただきました。古典籍が新たな文化・芸術の中で再生してゆく現場に触れ、大変刺激的かつ爽りの多い機会となりました。（中西 智子）



総合研究大学院大学日本文学研究コースの近況

2023年度入試説明会 対面及びオンラインで開催

9月30日（土）、日本文学研究コースでは、入試説明会を対面とオンラインを合わせたハイブリット形式で開催しました。4年ぶりに対面で参加者を迎えることができ、同時にオンラインで遠方の方にもご参加いただける機会となりました。

参加者はコースの特色や入試についての説明を受けたのち、希望する教員と個別に面談を行い、研究内容や今後の研究計画について話し合いました。続いて在学生・修了生との懇談会では、参加者は入試の体験談や学生生活における経済支援など、学生視点で語られる話にとても関心を寄せ、熱心に質問していました。

対面参加者には、説明会の最後に国文学研究資料館の施設案内がありました。閲覧室で教員や在学生・修了生とともに、貴重書を含む当館の古典籍や当コースの教育研究プロジェクトで選定した書物など、多彩な原本を手に取りながら説明を受けました。さまざまな質問や感想も出て、和やかなひとときとなりました。続いて、普段は入室できない地下書庫の見学を行いました。

ハイブリット形式での開催はそれぞれに参加方法を選択でき、遠方の方も参加しやすい点にメリットがあったと思います。また、閲覧室での原本展覧は初の試みでしたが、研究環境を実感していただく一助になったようです。参加者の皆さんにとって、この説明会が進学後の学生生活や、研究環境への理解を深めていただく機会となったことを願っています。

（齋藤 真麻理）



閲覧室にて教育研究プロジェクトで選定した古典籍を閲覧

くずし字講座「くずし字で昔ばなしを読んでみよう！」開催

2023年7月8日(土)、東大和市立清原図書館(新堀地区会館)にて、くずし字講座「くずし字で昔ばなしを読んでみよう！」(担当講師: 糸特任助教・人文知コミュニケーター)を開催しました。講座の前半で「くずし字(変体仮名)」の概要と、その読み方について解説したのち、後半では室町時代の物語草子である御伽草子『浦島太郎』の名場面の文章を、一人一行ずつ担当を決め、変体仮名の一覧表を片手に順番に翻字していきました。くずし字を初めて読むという方が多く、最初は戸惑いながら答える様子が見られましたが、最後には皆さん自信をもってすらすらと解説していました。



国文学研究資料館では、多摩地域における学術・文化の発展に関する事業を継続的に実施するため、国文学研究資料館を中心に各参加団体で構成するプラットフォーム「ぷらっとこくぶんけん」を設け、くずし字講座など、地域の方々に古典の魅力を伝えるイベントを開催しています。多摩地域を拠点に活動する団体で、「くずし字講座を開いて欲しい」「国文学を学ぶ講座や和本作りワークショップを開催したい」等のご希望がありましたら、ぜひ当館にお問い合わせください。(糸 汐里)

ぷらっとこくぶんけんについての詳細はこちら
<https://www.nijl.ac.jp/activity/plat/>

表紙絵資料紹介

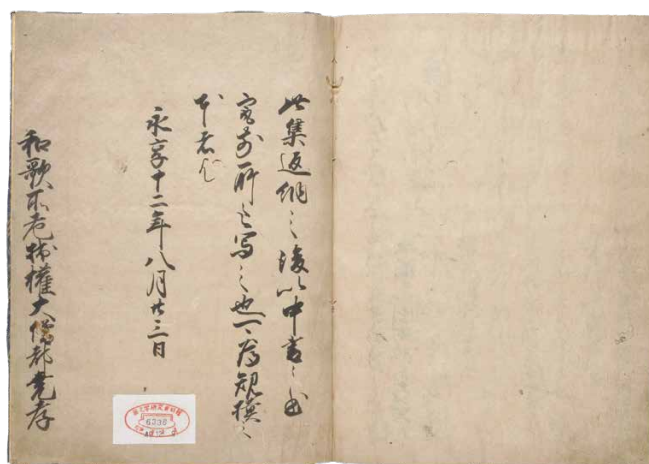
『^{しんしよくこきんわかしゅう}新続古今和歌集』(当館蔵 貴重書99-6)

[室町中期] 写 袋綴1冊 27.6×21.0cm
<https://doi.org/10.20730/200003054>

二十一番目の勅撰和歌集。勅撰集の掉尾を飾る撰集でもある。永享5年(1433)8月、將軍足利義教の執奏を経て後花園天皇の^{かめい}下命により編纂開始、同11年6月に返納(完成)をみた。全20巻。撰者を務めたのは、時の和歌宗匠飛鳥井雅世(1390～1452)で、飛鳥井家歌人としては初の単独撰者抜擢であった。ただ宗匠家としての飛鳥井家は未だ新興。勅撰集編纂を行うに十分な蔵書・故実の蓄積はなく、完遂には多くの廷臣や歌僧の助力があったことが知られる。中でも和歌所開闢

(「開闢」は文書の管理を司る役)として、撰集作業を全面的に補佐した^{じょうこういんぎょうこう}常光院亮孝(1391～1455、頓阿の曾孫)の存在は大きく、最新の研究では本集の実質的な撰者とまで目されている。

掲出書は、そうした亮孝による新続古今和歌集の抄出本。奥書に「此集返納之後、以中書之本最前所令写之也、可為規模之本者歟、永享十二年八月廿三日、和歌所老拙権大僧都亮孝」とあって、返納の直後、手元の中書本(清書本の前段階の本)をもって書写したもの。全2144首から649首が抜き出されている。「規模之本(眼目となる本)たるべきものか」とあるように、まさしく撰者「選りすぐり」の一冊といえるものである。本書を亮孝自筆とみるかについては、判断が分かれるところであろうが、料紙に薄様を用いたやや大振りの袋綴本で、同時期の書写とみて疑いない。学問的にも、文化的にも極めて価値の高い写本である。(川上 一)



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3
Tel:050-5533-2910 Fax:042-526-8604

国文研ニュースNo.64
発行日 令和6(2024)年1月17日
編集 国文学研究資料館 資源活用連携部
製作 株式会社トリッド
©人間文化研究機構国文学研究資料館